

## 【現存する茶席と好み】

### ◆ 待 庵

利休の茶席として、現存最もその原型に近い形で残っているのは、山崎妙喜庵の「待庵」である。待庵は、秀吉の命により、利休のさしずで、この妙喜庵につくられた茶席であることは間違いないようである。この茶室は、二畳隅炉というきわめて小さい茶席であるが点前座の左側にふすまを隔てて、一畳の踏み込み畳があり、ここにつり棚があってあたかも、今日の不審庵の原型であるかのごとく思われるところがある。これは文禄、慶長の役のとき盛んに作られた「高麗囲い」の一種であるという説もある。四畳半の中に床をとり、踏み込み畳のほうをかこってつくられた形と考えられる。

待庵の床は「室床」で有名である。しかもきわめて低く、形の小さいものである。またにじり口が普通のものより大きく、障子などにも特徴がある。

### ◆ 不審庵

現在家元「不審庵」は三畳台目で、江岑のときの形をそのまま今日に伝えている。天明大火のときまでは、残月亭の南に突き出した形にあり、水屋の位置が今日とは違っていた。「不審庵」とは利

休の室号で、かつて大徳寺門前の四畳半に古溪和尚筆のこの額面をかかっていたことが、「江岑夏書」にしるされている。その後、不審庵は聚楽の利休屋敷にもあったと考えられるが、確然としていない。利休自刃ののちに、不審庵は少庵、宗旦によって踏襲された。

この間茶室はいろいろの形に変わっていたようである。宗旦は、ある時代には利休一畳半の座敷を復刻して、これを不審庵と称し、また新しい四畳半を建てて、不審庵の額をかかげたという記録がある。さらに、今日の不審庵は江岑宗左のときにつくられた形式を継いだものであるが、いずれも利休好みの指図絵をもとにしてつくられたものであった。現在の不審庵は三畳台目で、炉の点前座の向こうに茶道口を持ち、そのため勝手のほうに板畳を入れて、しかも腰はりのところを板ばりにしてある。茶道口は太鼓ばりの開き戸で、きわめて特徴のある構造である。現在は点前座の上の欄間に古溪和尚筆の隷書体の「不審庵」の額字を板に彫ってかけてある。

#### ◆ 不審庵祖堂

家元祖堂は「点雪」と呼ばれる四畳半の茶室で、道安囲いを持ち、床の位置に上段がありその脇に床、向こうに円窓をへだてて、利休居士の座像が安置してある。

#### ◆ 残月亭

表千家の「残月亭」は利休の聚楽屋敷にあった九間の書院を原型にしたものと考えられている。少庵のとき、この地に移されたもので、当時の記録にもこれが太閤お成りの間であったことを伝えている。二畳の上段のある十畳敷で、上段のすぐ下に付け書院がある。大屋根の切り妻の下に清巖和尚筆の「残月亭」のぬれ額がある。

#### ◆ 実相庵と閑隠席

利休の茶室として堺南宗時の「実相庵」（復刻）や大徳寺聚院の「閑隠席」などがあるが、いずれも二畳半、あるいは三畳の典型的な茶席である。

#### ◆ 宗旦の茶室

宗旦の茶室としては、裏千家の今日庵、又隠などがある。これらも利休好みをほとんどそのままに取り入れ、これに自身の作意を多少加えてつくられたと考えられる。たとえば今日庵には、点前座のわきに水屋道庫が設けられている。その他、宗旦好みには、現在東京三井八郎左衛門邸にある「前後軒」がある。これは二畳台目に中柱があり、勝手付の壁につけてつり棚がある。また昔、大徳寺芳春院に宗旦好みの二畳の茶室があったことが「槐記」にのっている。

#### ◆ 原叟好み

覚々斎は、茶の湯の庶民化という点で業績の高い家元である。たとえば、富士形の百陀釜や琉球風炉に合わせて好んだ田口釜などが数多く残っており、世間に広く茶道が流布したことを思わせる。

茶室の方でも、原叟にはこれに相通じるような好みがある。大徳寺聚光院の原叟好み「柵床」の席や、同じく板床で踏み込み床にした三畳半なども、四畳半の一部に床を切り取った形で、その簡易な構造が特徴である。

#### ◆ 如心斎好み

如心斎好みの茶室には、大徳寺玉林院の「蓑庵」などがあるが、如心斎は七事式制定にちなみ八畳敷の「花月楼」、その他の広間にも好みがある。また珍しい形として、「天の川席」と言うものもある。

#### ◆ 卒啄斎好み

家元にある七畳敷きは卒啄斎好みである。この席も八畳敷きの中に、台目床を埋め込んだような形で、広げれば八畳に相当するが、つめれば四畳半ともなるというきわめて伸縮性のあるのがこの席の特徴である。祖堂の一隅にある反古張りの一畳半もまた卒啄斎の好みである。一畳半本勝手の向こう切りで、にじり口は二枚腰障子の

貴人口風につくられ、その外側にひさしを低くのぼして袖垣でかこい、坪の内風にした落間のあるのが特徴である。

#### ◆ 無一物

七畳に接し玄関袴付けとは、廊下をへだてて「無一物」の席がる。これは碌々齋好みで逆勝手である。

#### ◆ 鳳来軒

東京出張所の「鳳来軒」は、家元不審庵を一回り広めたような形であるが、席の構えは不審庵と同じである。即中齋の好みで点前座左側上の壁に、高松宮妃殿下の御筆による席号がかかげられている。同じく広間「看雲亭」は家元松風楼の形を写したものでその原型は花月楼である。

その他、由緒深い茶室は数多く現存している。洛南の水無瀬神宮にある「燈芯亭」は後水尾上皇の御茶屋を移したものであり。有楽苑にある「如庵」は、織田有楽の好みで京都建仁寺にあったのを、明治の末に三井家に移され、のちさらに大磯の別邸から犬山に移された。仁和寺にある「遼廓亭」は、もと尾形光琳の茶室であるが、後に移されたが形は如庵そのままである。大徳寺三玄院の「篁庵」、藪内家元の「燕庵」はいずれも三畳台目で、客畳の後ろに相伴席を

持ち、古田織部好みの形である。名古屋に「猿面席」があったが、これは四畳半台目という広い茶室で、これも武家好みらしい風格をそなえた茶室である。鷹ヶ峯光悦寺にある「大虚庵」は本阿弥光悦の茶室であるが、これも光悦らしい風格を持った茶室である。

小堀遠州好みとしては、大徳寺狐蓬庵の「忘筌」「山雲床」の席、男山八幡の「松花堂」などがあり、京都桂離宮の中にも遠州の影響が多分に含まれている。また、大徳寺真珠庵にある「庭玉軒」は金森宗和の好みと伝えられ、昔の坪の内を思わせる土間に蹲いがあり、その屋根ひさしに突き上げ窓がある。